

はじめに

本報告では、熱田神宮の縁起の一つである『熱田の深秘』【史料1】が成立した社会的背景について考察する。『熱田の深秘』は、伊藤正義氏によって紹介された。伊藤氏によれば、中世日本紀(1)の内容に、熱田神宮で形成されたと推定される熱田に関わる土地と諸社の詳細な縁起が肉付けされている。そして『熱田の深秘』の末尾の功德書と、慶応義塾大学図書館所蔵本の形態を根拠に、『熱田の深秘』が唱導のテキストであったと論じている。また、『平家物語 剣の巻』(2)【史料2】は、『熱田の深秘』と同様の内容を持っている。阿部泰郎氏は、『熱田の深秘』が、それ以前に成立した『熱田宮秘積見聞』(3)、『熱田大神宮秘密百録』(4)の内容を踏まえていることを指摘している。また熱田の神が王権を守護する内容である『菅崎宮記』の説話を取り込んでいることに着目している。星優也氏によれば、『熱田の深秘』鹿児島県入来神舞に取り込まれており、近世における受容も注目される。

先行研究は、『熱田の深秘』が中世日本紀の一つであることに着目して、王権との関係から分析している。しかし、中世の熱田神宮は尾張国に所領を持っており、尾張国の人々が熱田神宮修造の檀那であるなど地域社会と密接な関係にあった(上村喜久子、初出2004)。私は、『熱田の深秘』の作成に、尾張国の社会動向が関係しているのではないかと考えている。

『熱田の深秘』が作成されたと推定される1500年前後には、熱田神宮寺の末寺であった笠覆寺が無断開帳を実施し、熱田神宮寺の末寺支配が動揺している。『熱田の深秘』の成立は、熱田神宮寺による末寺支配の動揺と克服の過程に位置づけられると考えている。

『熱田の深秘』の基本情報

○諸本(太田正弘2006)

- ・慶應本：横山重氏旧蔵。横山重氏によれば、文明(1469～1487年)―天文(1532～1555年)ごろ成立。慶応義塾大学図書館所蔵。(底本)
- ・山本本：安土桃山時代から江戸初期成立。椿大神社所蔵。
- ・持明院本：慶長十八年(1613)成立。高野山大学図書館所蔵。
- ・正教蔵本：萬治二年(1659)成立。西教寺正教蔵所蔵。
- ・天理本：大永六年(1526)成立。天理大学図書館所蔵。

○末尾の功德書(今堀太逸1990)

・末尾に「一度参詣の衆生、一念信心を致すもの、御利生を蒙らすという事なし。大悲の御誓、あまねくて、誠に有難き事なり。神は本地を現すことを喜び給へと、これは、習いなき神秘なり。これを語る物、垢離を取りて、信心を致さずんは、御罰を当たるへし。卒爾に読みて、人にも聞かせへからず。心あらん人に聞かすへし。振舞をせさる人には無益よし。返々、神秘なり。秘すべし／＼。秘蔵、／＼。あらおうてや、／＼。りく(ママ)。」とある。→伊藤正義氏は、この功德書を根拠に、『熱田の深秘』が唱導に用いられたと論じる。

・『諏訪縁起(諏訪の本地)』、『北野天神縁起』、『三嶋大明神縁起』など、唱導に用いられたと推定される縁起類にも、『熱田の深秘』と同様の功德書がある【表1】。

→『熱田の深秘』も唱導に用いられたと推定される。

成立年代の手がかり

・『熱田の深秘』は、熱田神宮の五月五日神幸祭を記す。

→熱田神宮における五月五日神幸祭の、史料上の初見は、『文明十七年年中行事』(5)【史料3】の「五月五日内院供御、鎮皇門ニ御幸、御馬ノ頭人色色議式アリ」という記述。

→『熱田の深秘』の成立の上限は、文明十七年(1485)か。

・『神仙秘訣集』(6)【史料4】は、『熱田の深秘』を引用している。『神仙秘訣集』は、大永五年(1525)成立。

→『熱田の深秘』の成立の下限は、大永五年(1525)か。

『熱田の深秘』の作成者について

→熱田神宮寺の関係者ではないか

熱田神宮寺について(上村喜久子、初出1992)

・熱田神宮寺の存在を示す最も早い記録は、承和十四年(847)の太政官符写。

・熱田社座主(熱田神宮寺のトップ)の初見は、文永七年(一二七〇)十二月晦日写『熱田踏歌頌文』。

「熱田踏歌頌文」の奥書には「座主堯観^{歳十三時}従信濃権口読伝本也」とある。同書の校合朱筆には「代々御本并真慶座主及奉昵宿禰本三度令交点畢」とみえ、堯観以前の座主真慶の存在を知ることができる。

※真慶は、熱田祝師尾張宿禰田島氏系譜に、大宮司員職の五男「真慶<sup>熱田座主如法印僧都
号明勝坊</sup>」である。

・尾張氏にとって座主は、大宮司職とともにかつて一族が相伝していたが、平安末期以降、その手を離れていた。尾張氏が座主職を取り戻したのは、十五世紀以降。

・熱田神宮大宮司は、十一世紀以降、主に千秋氏が歴任。熱田社座主は、十五世紀以降、尾張氏が歴任。

『熱田の深秘』の作成者が、熱田神宮寺関係者である根拠

A 熱田の宝剣には、愛染明王が宿るの部分

B 住吉大明神に尊称をつけない部分

C 八剣宮の由緒に結びつく宝剣盗難事件

A 熱田の宝剣には、愛染明王が宿るの部分

・『熱田の深秘』が採録する紀太夫と源大夫の話や、宝剣盗難事件の話は、中世日本紀に類話がある。

↑

・一方で『熱田の深秘』中の「熱田の宝剣には、愛染明王が宿る」という部分は、中世日本紀に類例が見つからない。ただし、熱田神宮と関係の深い氷上姉子神社で作成された『神仙秘訣集』と、鹿児島県入来神舞資料である『八剣之祭文・諏訪之祭文・宇婦之祭文』【史料5】には、同話が採録されている。

・『勸進沙門某熱田奥院造営勸進状』は熱田神宮寺文書である。また、熱田神宮奥之院にあった愛染明王が、熱田神宮寺の愛染堂に移されている【史料12】。以上のことから、熱田神宮奥之院は熱田神宮寺の管理下にあったと推定される。

・熱田神宮奥之院には、愛染明王が祀られていた。そのことは、以下の史料から分かる。

○『熱田の神秘』【史料1】（南北朝期以降成立）

『熱田の神秘』では、熱田大明神の持つ剣には、愛染明王が宿っており、この剣の光にあたる者は、必ず成仏得道の縁となると記されている。ここでは、熱田神宮に参詣することで、愛染明王の剣の光に当たり、成仏得道できることが説かれている。

○『勸進沙門某熱田奥院造営勸進状』(7)【史料6】（天文三年〈1534〉以降成立）

『勸進沙門某熱田奥院造営勸進状』には、愛智郡呼次浦の重政が、死んで地獄に落ちた際に、大聖に助けられ、蘇生した。呼次浦の重政を助けた大聖は、熱田神宮奥院の愛染明王であった、という話が記されている。ここでは「熱田奥院建立の時、諸人材木を引く、彼は、縄に手を懸け引き大聖に結縁す。」と記され、熱田神宮に貢献する者は、地獄に落ちても熱田神宮の愛染明王に救われることが説かれている。

○『熱田太神宮奥之院愛染明王并弘法大師之略縁起』(8)【史料7】（正徳三年〈1713〉以降成立）

『熱田太神宮奥之院愛染明王并弘法大師之略縁起』では、熱田神宮奥の院に祀られている愛染明王は、「衆人乃愛敬増益等の五種の功德を施し、後世にハ願所の浄土に往生せしめ玉う」と説かれている。また、熱田神宮奥の院は荒廃しており、清寿院に愛染明王と弘法大師像を預けていたが、元禄十六年(1703)に再興された際に像が戻されたことも記されている。

●「熱田の宝剣には、愛染明王が宿る」という記述は、熱田神宮奥之院（熱田神宮寺の管理下）に愛染明王が祀られていたために、生み出された言説ではないか？

B 住吉大明神に尊称をつけない部分

・『熱田の深秘』に採録される宝剣盗難事件の話に着目する。この話は、新羅の道行法師が熱田神宮の宝剣を盗み出した時「熱田大明神、住吉へこの由告げて申させ給いしかは、住吉、筑紫の博多へ飛び渡らせ給いて、道行法師を蹴殺し」という内容である。

・『熱田の深秘』に採録される宝剣盗難事件の話では、住吉大明神に尊称を付けずに「住吉」と呼ぶ。また、熱田大明神が「住吉」を使役する話となっている。

→なぜ、住吉大明神に尊称をつけないのか？

→この部分が、『熱田の深秘』の作成者の立場を示しているのではないか。

※『神仙秘訣集』にも、同じ部分が採録されているが、そこでは「住吉大明神」になっている。

・住吉大明神の扱いについて理解する際には、天台神道説の「住吉は副将軍為り」という記述が参考になる。

○「住吉は副将軍為り」という天台神道説

『日吉山王記』(9)【史料13】(1342年成立)などの天台宗寺院で作られた天台神道説集には、「住吉大明神託宣して云はく、『昔新羅を伐ちし時、吾れは大將軍為り。日吉は副将軍為り。其の後将門を伐ちし時、日吉は大將軍為り。住吉は副将軍為り。是れ天台宗の繫昌に依り、日吉は法施を受くること無限にして、威徳倍增せる故なり』と云々」という記述がある。他にも、天台神道説集である『耀天記』、『日吉山王利生記』、『山門由緒堂舎記』にも同様の記述がある。

→天台宗の繫昌により、日吉と住吉の立場が逆転したことが述べられている。

●熱田神宮寺は、天台宗である。そのため熱田神宮寺の僧が、天台宗の立場から「住吉」に尊称を付けず、熱田大明神が「住吉」を使役する話にしたのではないか。

○大明神号について (今堀太逸 1990)

・永承七年(1052)以降の国内神名帳では、「大明神」は「明神」の上位の神号として使用されている。

・神号としての「大明神」が普及するのは「大明神」と号せられる神は「生身の仏」だと認識されたことによる。

C 八劍神社の由緒に結びつく宝剣盗難事件

・『熱田の深秘』に採録される宝剣盗難事件の話は、次のように展開していく。道行法師が熱田神宮の宝剣を盗みだすことに失敗したことに怒った新羅の帝が、生身の七不動を祈り下して日本に攻め寄せたため、熱田大明神がこのことを天照大神へ告げ、九萬八千の^{イクサカミ}軍神により新羅を倒した。生身の七不動の（持っていた）劔を元の劔に相添えて、八劔の明神として祀った。

→宝剣盗難事件は、熱田神宮の摂社である八劔神社の成立譚へと結びつく。

・八劔神社の由緒に結びつく宝剣盗難事件の話は、熱田神宮周辺で作成された縁起では、『熱田の深秘』と『神仙秘訣集』のみに採録されている（『尾張国熱田太神宮縁起』など、熱田神宮の他の縁起に採録される宝剣盗難事件の話は、八劔神社成立には結びつかない）

→『熱田の深秘』において、八劔神社の由緒が語られる必要があった背景を考えたい。

○八劔神社について

・やつるぎ - じんじゃ 【八劔神社】（日本国語大辞典）

名古屋市熱田区にある熱田神宮の別宮である八劔宮（はっけんぐう）の旧称。熱田神宮正面参道の左側に鎮座。元明天皇が和銅元年（708）に創建して宝剣を奉納したのが始まり。明治十三年（1880）八劔宮と改称。

・尾張国の鎮守社に、熱田八劔神社が勧請されている。八劔神社を勧請することは、熱田神宮を勧請することと同義であったと考えている。

→八劔神社が、尾張国において広く信仰されていた。

・熱田神宮の『文明十七年年中行事』には、八月七日八劔宮の供御に「尾張八郡ヨリ傍官衆有出仕、奏神楽」とある。

○熱田神宮寺による八劔神社の利用

・『尾張志』(10)には「日安養寺（割注：若宮宮寺）本尊ハ熱田八劔ノ御作、即座下ニ靈劔敷ト云々、これらの説を按、則當社ハ熱田ニ攝祠ナルカ。」という記述がある。

→「熱田八劔大明神が本尊を作った」伝承を持つ寺は、熱田神宮寺の末寺であることが分かる。

・笠覆寺（11）で作成された『笠覆寺縁起』と、熱田神宮寺の塔頭である如法院で作成された『笠覆寺縁起』を比較検討した上村喜久子氏（初出 1992）の研究がある。上村氏によれば、熱田神宮寺塔頭如法院で作成された如法本『笠覆寺縁起』（1550年成立）は、笠寺本『笠覆寺縁起』と比べて八劔大明神（熱田神宮の摂社）の靈威が強調されている。

→熱田神宮寺は、笠寺支配の動揺に際して、八劔神社の靈威を強調している。

・笠覆寺、性海寺（12）、蓮華寺（13）は、元々は、熱田社領であった場所に建立されている。それらの寺社縁起では熱田神宮との関係が説かれている。また、上村氏によれば、寺の敷地に対する熱田神宮の潜在的な支配を象徴するものとして八劔神社が勧請されている。

○熱田神宮寺が、『熱田の深秘』を作成した経緯の推定

- ・熱田神宮寺と笠覆寺の争論になり、1500年前後に熱田神宮寺の末寺支配が動揺。

↓

熱田神宮寺による末寺支配の動揺を克服するために、熱田神宮寺が末寺支配に利用している八剣神社の由緒を含む『熱田の深秘』を作成したのではないか。

…末寺支配の正当性を示す。また、熱田神宮・寺の靈験を宣伝する。

時代背景（上村喜久子、初出 1992）

○笠覆寺と熱田神宮寺の争論

- ・1510年頃以降、笠覆寺と熱田神宮寺が争論になっていることは、「熱田社座主憲信覚書」【史料 14】から読み取れる。

- ・永正七年（1510）に、熱田神宮寺に無断で、笠覆寺が開帳を行った。

→熱田神宮寺が織田達定を頼る。永正七年（1510）三月五日「織田達定書状」が出され、理運の旨を以て仰せつけられた。

- ・この十七、八年後（1527、8）にも再び無断開帳が行われた。

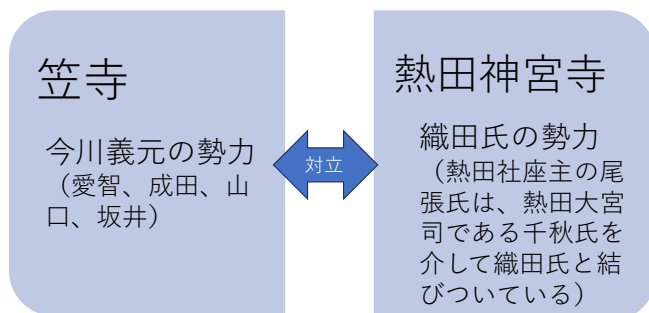
→熱田神宮寺が織田達勝を頼る。織田達勝書状（現存せず）が出され仰せつけられたが、在所（笠寺）かく承引申さず。

○笠寺と熱田神宮寺対立の背景

1500年前後に、今川氏方の武士（山口氏ら）が、笠寺へ寄進を行っている。織田氏と熱田神宮は、熱田大宮司家を介して結びついていた。

→笠寺と熱田神宮寺の対立の背景には、政治状況があった。

【図 1】（報告者作成）



○笠寺の無断開帳に対する熱田神宮寺の対応

- ・熱田神宮寺が織田氏に依頼して、笠寺の無断開帳をいさめる文書を出してもらう。
- ・熱田神宮寺は、「笠寺が没落した際に、八剣神社と十一面観音の御利生のおかげで再興した」ことを述べる。

→熱田神宮寺の末寺支配の論理に、八剣宮が用いられている。

まとめ

- ・『熱田の深秘』には、熱田神宮寺が関与して成立したと推定される説話が含まれている。
- ・熱田神宮寺と笠寺の争論になり、1500年前後に熱田神宮寺の末寺支配が動揺。

↓

熱田神宮寺による末寺支配の動揺を克服するために、熱田神宮寺が末寺支配に利用している八劍神社の由緒を含む『熱田の深秘』を作成したのではないか。

→末寺支配の正当性を示す。また、熱田神宮・寺の靈験を宣伝する。

注釈

(1) 「中世日本紀」(『百科事典マイペディア』平凡社、1990)

《日本書紀》の注釈書。神仏混淆の中世神道教義の整備に伴って、その〈神代紀〉を〈神典〉として仰ぐ傾向が強まり、仏教思想や中国故事を用いて、書紀本文を自在に解釈した。従来低い価値しか認められてこなかったが、歌論書や説話集との交渉等について、近年急速に研究が進みつつある。神代巻本文への書き込みの形も含め、多くの本が残されているが、一条兼良の《日本書紀纂疏》(15世紀半ば)や吉田兼俱の《日本書紀神代抄》、清原宣賢の《日本書紀神代巻抄》(1536年)などは写本も多く広く読まれた。

(2) 『平家物語 剣の巻』(伊藤正義監修、磯馴帖刊行会編『磯馴帖 村雨篇』和泉書院、2002) 中世から近世初期にかけて、『剣巻』とよばれる作品があつて、軍記文学と、その成立や素材や享受の面で独特の関係を有しながら、それ自体で存立してもいたらしい。ほかにも『太平記』巻三十二「鬼丸鬼切事」や巻二十五「自_二伊勢_一進_二宝剣_一事」の記事の内容は、一部『剣巻』と共通しながら、異説を多く含んでおり、「曾我物語」仮名奢八「箱根にて暇乞の事」や、「室町時代物語大成」所収「熱田の神秘」「神道由来の事」、『神道集』巻一「神道由来の事」、幸若「つるぎ讃嘆」、「第十六「靈剣」、内閣文庫蔵『物語補闕剣巻』など類似の説話を含む作品は多い。名剣に対する関心はいつの時代にもあるが、特に武士の時代であり、壇之浦の宝剣紛失事件で開幕し、王権の危機が叫ばれた中世には、特に強かった。王威のよって来たる基を尋ね、日本国の始源を語り、一方では鎌倉期軍記文学のエッセンスを集めた形になっている「剣巻」は、小さいながら中世の一面を最もよく表す作品なのである。(松尾葦江)

(3) 『熱田宮秘釈見聞』(熱田神宮宮庁『熱田神宮史料 縁起由緒編』2002)

本書は体系立った叙述はなされていないが、まず熱田大明神の本地は、天竺の五智大日如来であり、衆生を化度せんがために、この地に垂迹したと説き起こす。その五智大日如来とは、東方阿闍仏が素盞鳴尊、南方宝生仏が宮簀媛、西方阿弥陀如来が伊弉冉尊、北方釈迦如来が稲種尊、中央の大日如来が天照大神であり、天叢雲剣にはほかならないと説き、熊野権現と伊勢大神宮とは一体分身であると述べる。この解説は、真言密教の理論に基づくもので、大日如来の五智に金剛界曼荼羅の五仏を配し、それらが当宮の祭神五座に当たると説くもので

ある。以下は、阿部泰郎氏による年代推定。伝来不明。南北朝期成立の、宥恵による『聖教目録真福寺』に、「熱田宮秘釈」として載るのが本書か。南北朝期頃、成立か。同じ内容を持つ本には、熱田神宮蔵田島家旧蔵本「熱田宮秘釈見聞両部記」（伊勢高岡山能実法印所持本に拠り元禄十三年写）と神宮文庫蔵林崎文庫旧蔵本「熱田宮記」があり、前者は真福寺本と表記上多少の相違があると指摘される。

(4) 『熱田講式』（熱田神宮宮庁『熱田神宮史料 縁起由緒編』2002）

神分の末に和歌三首を掲げているが、このうち、最後の「世にかくて」の一首は、南北朝時代に活躍した歌人冷泉為秀の歌である。この一首は、正平二十一年（貞治五年、1366）に自らも判者として参画した『年中行事哥合』に収録されているものである。→熱田講式は、正平二十一年（1366）以後の成立か。以下は、阿部泰郎氏による年代推定。伝来および書写者不明。『大須経蔵目録』および『経蔵目録稿本』の神道書の部に「熱田講式一卷」として見えるのが本書とすれば、室町末期までに入蔵していたと思しい。天野信景の著「塩尻」巻九十一に、本書と同内容の講式本文を抄出し、その奥に「永正六年己巳八月日、座主大僧都良信花押アリ」と記す。これが何の本に拠ったものか明らかではないが、少くとも他にも同文の伝本が存在し、その成立が永正六年（1509）以前に溯る可能性がある。

(5) 『文明十七年年中行事』（熱田神宮宮庁『熱田神宮史料 年中行事編上巻』1971）

『文明十七年年中行事』は伝本はないが、『張州雑誌』巻四十九に全文が載せられているので、それによって知ることができる。『雑誌』巻四十九の巻首の目録に「年中行事旧記」、とあり、本文の外題には、「附録」の次に「年中行事（割注）古記也、故ニ爰ニ附ス、今ノ行事ニ異ル事多」あって、正月元日から十二月節分までの行事を簡略に挙げている。その奥書のうちに、「文明十七年己巳（乙巳か）十二月廿五日」の年紀があるので、世に『文明年中行事』とも呼ばれている。

(6) 『神仙秘訣集』（熱田神宮宮庁『熱田神宮史料 縁起由緒編』2002）

この書は、熱田神宮に関する縁起・由緒について、中世において秘訣とされる伝承を取り纏めたもので、氷上宮社務久米家に伝来した。奥書によれば、本書は、大永五年（1525）八月十五日に久米吉長が書写した本の写。久米吉長については、社務の久米家には同じ名前を名乗る者が多く、また関連する史料も乏しく特定することはできない。

(7) 『勸進沙門某熱田奥院造営勸進状』（熱田神宮宮庁『熱田神宮史料 造営遷宮編上巻』1980）この勸進状は、春日井市の密蔵院所蔵の旧如法院文書の一つである。冒頭に、「勸進沙門敬白 請下蒙ニ殊十 方檀（那）息助盛尾州愛智郡熱田奥院遂中造営上状」とあって、熱田奥院の造営についての勸進であることが知られる。本文は、当宮に参詣した空海が数々の靈験を示したことによって建立されたこの奥院も、天文三年（一五三四）の再興の企ても成就せず、現在では、まさに荒廃した姿を呈していることを訴え、また、かつて悪業をつくした重政なる人物も、この奥院を建立する手助けをしたことから、熱田大神・愛染明王の加護よって地獄より救われた話を挙げて、当院造営勸進の御利益の大なることを述べ、この度の修造にあたって、諸人の喜捨を呼びかけている。この勸進状の年代については詳らかでない

が、本文中に「天文三年春比、雖_レ企_レ再興_レ未_レ造畢_レ」ことあることから考えて、天文三年以後に成ったものと推定される。なお、この勸進状は、今回の調査で、同寺に見当らなかつたため、『春日井市史』資料編続に収録されているものから転載した。

(8)『熱田太神宮奥之院愛染明王并弘法大師之略縁起』(熱田神宮宮庁『熱田神宮史料 縁起由緒編』2002)名古屋市熱田生涯学習センター所蔵。本書は、弘法大師空海に関わる当宮奥之院に祀る愛染明王像・弘法大師像について説明し、愛染明王の縁日に詣でて一心に祈るならば願いが成就すると説く。すなわち弘仁十一年(八一)に弘法大師は、嵯峨天皇の勅命により、当宮で一千日の修法を行い、自ら刻した愛染明王像と肖像とを納めた。その後、奥之院堂舎の荒廃により、この二像は名古屋の清寿院(浅間寺、明治三年廃寺)に預けられたが、元禄十六年(一七〇三)、江戸幕府の援助で神宮寺が再興されたおり、新たに愛染院が建立され、先記の二像が祀られたという。本書の成立は不詳であるが、『豊山伝通記』の書名が見え、同書の成立した正徳三年(一七一三)四月以後と考えられる。本書は単に仏像の説明をするだけでなく、仏教的立場から当宮を眺めており、弘法大師一千日修法の通りの關伽水を汲んだのが末社清水社であるなどの記載もある。

(9)『日吉山王記』(天台宗典編纂所編纂『山王神道1』續天台宗全書、春秋社、1999)本書は、日吉社の諸行事記録の類書として翻刻したもの。撰者は明記ないが、日吉社祇宜の成仲や親成などの説を始め、日吉社社司関係の資料を多く用いていることからみて、撰者は日吉社の社司かと思われる。成立は、文中に暦応四年(1341)・同五年を「当御代」として注記していること、また扉の注記にも「暦応年中撰之歟」とあり、暦応五年頃の成立かと思われる。

(10)「尾張志」(日本古典文学大辞典編集委員会編集『日本古典文学大辞典』第1巻、1983)六十巻目録一巻、付図十四枚。地誌。深田正留・岡田啓・中尾義稲共著、植松茂岳校、小田切春江画。天保十四年(1843)正韶序。【内容】尾張一国の都市・郷村・人物・物産・軽・寺院・名所・古跡などを郡別に挙げて、その現状と沿革とを記述したもので、名所や古跡などについては、古歌や詩文の引用が多い。尾張学界の長老深田正韶が藩命をうけて監修の任にあたり、すべて藩士の手になった。藩撰の地誌には宝暦二年(1752)の『張州府志』(三十巻、松平君山著)もあるが、本書はそれを増補した上、平易な和文で記され、利用しやすい。【諸本】天保十五年の浄書本六十一冊(序及び表題は正韶筆)と付図ヤ四枚(春江壺)が蓬左文庫にある。ほかに、内閣文庫本(明治七年写、三十一冊)、穂久通文庫本(三十六冊)など。[織茂三郎]

(11)笠覆寺(『日本歴史地名大系 愛知県の地名』平凡社、1981)現南区笠寺町上新町。天林山と号し、真言宗。本尊十一面観音菩薩像。俗に笠寺観音ともいい、尾張四観音の一つ。笠寺縁起によれば、天平年中(七二九-七四九)禪(善)光が、浜に漂着した霊木に十一面観音を刻んで堂宇を建て小松寺と称した。のち荒廃し、仏像が雨露にさらされるのを嘆いたある女が自らの笠を像にかぶせた。その女が太政大臣藤原兼平の妻となり、兼平が数百町の田畑を寄進し寺を再興、これにより笠寺と称するようになったと伝え

る。しかし再び寺領が減び、嘉禎四年(一二三八)祐福寺(現愛知郡東郷町)の僧阿願は、古寺の再建を領主念阿弥陀仏に願い、荒野三町余・水田一町二反の施入を受けた。この地が熱田社領内であったので、阿願は同年一二月に解をもって朝廷にうかがったところ、「宣陽門院序下熱田社司等可且依社家免判、且任阿願申請、停止院役社役并檢非違所使入部、令禁断殺生、当社領笠寺敷地荒野参町余事」とする下文(笠覆寺文書)を賜った。笠覆寺の名は応永二五年(一四一八)文書に初見。以後は笠寺・笠覆寺を互用。慶長一四年(一六〇九)三月、備前検の際田畑一町四反八畝余、高一五石が観音領として除地となり、ここからの物成を七口に分け、観音堂および西方院・東光院・泉増院・慈雲院・西福院・宝寿院の六塔頭の修理米とした(徇行記)。

(12) 性海寺(『日本歴史地名大系 愛知県の地名』平凡社、1981)

現稲沢市大塚町門前。川の東にあり、大塚山と号し、真言宗智山派。本尊一光三尊善光寺阿弥陀如来・愛染明王。寺伝(性海寺所蔵)によれば、弘仁年間(八一〇一八二四)(尾張名所図会では弘仁九年)空海の創建で、愛染明王を本尊とし、境内に大塚を築き大聖歓喜天の鑄像を埋納したと伝える。さらに承久三年(一一三一)浄蓮源延が信濃善光寺の如来三尊を模刻して安置した。建長年中(一二四九一五六)(図会では建長三年)熱田神宮家出自の良敏が、中島郡主民部大輔長谷部源政を大檀越として、中興開山となった。この時、本堂・灌頂堂・護摩堂・鐘楼・山門・多宝塔が建立された。本堂内の須弥壇墨書に「弘安四年八月十六日」とある。建保三年(一二一五)の祐信讓状(感応寺文書)には次のごとくある。

「讓渡 尾張国鱒江御品田井宮崎畠事、合 壱所 式町御品田、式所 五段宮崎屋敷、壱所 壱町同宮崎中河原畠、右、田畠者、祐信重代相伝所領也、而女子宮御則仁、限永代所讓渡也、於御公事等者、任先例可致其沙汰、仍子々孫々無他妨、可令領知、故讓状如件」。文永八年(一二七一)後堀河天皇の中宮鷹司院近衛長子から令旨を受けて官寺となり、弘安三年(一二八〇)中興第三世浄胤は蒙古再襲来に備え、花園上皇の要請で祈禱を行った。応長二年(一三一二)尼尊如より寺内修理工料として田畑が寄進され、元弘三年(一三三三)後醍醐天皇の綸旨、文和一年(一三五三)後光厳天皇より院宣を受けた。建武の争乱には、足利尊氏・直義の制札を得て破壊を免れ、その後、第三四世良円の時、甥の浅野長政の執成しで寺領一〇〇石が与えられた。江戸期には城主松平忠吉、尾張藩主徳川義直から、寺領一〇〇石を寄進された(性海寺文書)。元禄一二年(一六九九)住持頼景撰性海寺由来記(性海寺所蔵)によると、慶安元年(一六四八)本堂を再建し、後水尾上皇の勸旨で聖護院官道晃法親王筆の額を掲げ、寛文初期龕塔・須弥壇・壁・天井などを修補潤色、寛文一〇年(一六七〇)庫裏改作。延宝四年(一六七六)多宝塔修理(棟札)、同五年小堂造作、同七年総門造作、元禄四年鎮守社殿完成とある。

(13) 蓮華寺(『日本歴史地名大系 愛知県の地名』平凡社、1981)

現美和町蜂須賀。池鈴山と号し、真言宗智山派。本尊は阿弥陀如来。弘仁九年(八一八)弘法大師の開基という。大師が熱田神宮に参籠して一千日の護摩を修めた時、大師を急ぎ召すべ

き勅使があったため、大師は自分の像をつくって熱田にとどめて上京、これを身代り大師と
いった。勅用を果たした大師が再び熱田に参籠中、靈告により高須賀(蜂須賀)の森に伽藍を創
建したのが当寺である。闍伽の井を掘ったところ、五銚鈴が出て清水があふれ池となり、白
蓮華が生じた由縁で池鈴山蓮華寺と称された。一時荒廃したが、文永元年(一二六四)良敏が
中興し代々領主の特別な庇護を受けた(尾張志)。「寛文覚書」に「御領高外、元高五十石、
の境第一号として指定を受け、庭園は県指定名勝。寺宝の絵画金剛界および胎蔵界曼荼羅、
法華経紫紙鎌倉版八卷、木造仏頭は県指定文化財。毎年四月二四日講中によって極楽浄土を
現出する練供養が行われる。

参考文献

- ・愛知県史編さん委員会編集『愛知県史 資料編10』2009
- ・熱田神宮宮庁『熱田神宮史料 年中行事編上巻』1971
- ・同上『熱田神宮史料 造営遷宮編上巻』1980
- ・同上『熱田神宮史料 縁起由緒編』2002
- ・同上『熱田神宮史料 地誌編』2015
- ・阿部泰郎「日本紀と説話」(本田義憲[ほか]編『説話の場 : 唱導・注釈』1993年、勉誠出版)
- ・同上「熱田宮の縁起一『とはすがたり』の縁起語りから」初出1998年(阿部泰郎『中世日本の宗教テキスト体系』名古屋大学出版会、2013)
- ・同上「中世日本紀と王権一即位法と三種神器説をめぐって一」(阿部泰郎『中世日本の王権神話』名古屋大学出版会、2020)
- ・一宮市編『新編一宮市史 資料編1』1963-1988
- ・伊藤正義「熱田の深秘 : 中世日本紀私注」初出1979年、(伊藤正義 著, 片桐洋一, 信多純一, 天野文雄 監修『伊藤正義中世文華論集 第4巻』和泉書院 2022)
- ・同上「続・熱田の深秘 : 資料『神祇官』」1982年(伊藤正義 著, 片桐洋一, 信多純一, 天野文雄 監修『伊藤正義中世文華論集 第4巻』和泉書院 2022)
- ・伊藤正義監修、磯馴帖刊行会編『磯馴帖 村雨篇』和泉書院、2002
- ・今堀太逸「神社と悪人往生」(今堀太逸『神祇信仰の展開と仏教』1990、吉川弘文館)
- ・同上「「大明神」号の成立と展開」(今堀太逸『神祇信仰の展開と仏教』1990、吉川弘文館)
- ・上村喜久子「地方寺院縁起の展開と地域社会一笠寺縁起と熱田社」(『尾張の荘園・国衙領と熱田社』岩田書院、初出1992、2012)
- ・同上「中世地域社会における熱田信仰」(『尾張の荘園・国衙領と熱田社』岩田書院、初出2004、2012)
- ・猿猴庵著、名古屋市博物館編集『笠寺出現宝塔絵詞伝』名古屋市博物館、2005(名古屋市

博物館資料叢書；3．猿猴庵の本

- ・太田正弘編輯『神祇卷秘傳抄・あつたの深秘：諸本併記』玩古齋叢書 1、2006
- ・天台宗典編纂所編纂『山王神道 1』續天台宗全書、春秋社、1999
- ・日本古典文学大辞典編集委員会編集『日本古典文学大辞典』 第1巻、1983
- ・深田正韶 著『尾張志』上、歴史図書社、1969. 国立国会図書館デジタルコレクション
<https://dl.ndl.go.jp/pid/9569637> (参照 2024-02-26)
- ・藤本元啓『中世熱田社の構造と展開』続群書類従完成会、2003
- ・星優也「中世熱田信仰と第六天魔王神話—中世から近世へ—」(仏教文学会 2023 年 5 月例会レジュメ) 2023
- ・渡瀬淳子「『剣巻』の成立背景」(渡瀬淳子『室町の知的基盤と言説形成：仮名本『曾我物語』とその周辺』勉誠出版、2016)
- ・渡辺伸夫「鹿児島県入来神舞資料」(『演劇研究』(14), 1990、早稲田大学坪内博士記念演劇博物館)